

北海道厚真町における環境保全林を活用した 100年後の“ありたい姿”に向けたロードマップと 実現のために必要な人材

ローカルベンチャー協議会レポート
2025.2

北海道厚真町は、2016年のローカルベンチャー協議会発足時から幹事自治体として参画しています。同協議会の代表幹事である岡山県西粟倉村を参考に厚真町ローカルベンチャースクールを開催し、起業型地域おこし協力隊を呼び込み、育成する取り組みを行っています。それ以前には、家族向けの住宅建設などハード整備の移住政策により生活の基盤を整えていましたが、そこに移住者が厚真でやりたいことを応援するソフト政策を加えることで、さらに厚真町へ人が流入する流れを加速させてきました。

厚真町の町域の7割は森林です。かつては林業や製炭など森林関連事業を担う町内事業者が多く存在しましたが、年々減少し、森林資源の活用や維持が課題になっていました。そこで、厚真町はローカルベンチャースクールなどの施策を組み合わせながら、やる人を創出することをベースに林業施策を進めてきました。その結果、ローカルベンチャースクールを始めた2016年から2024年までに誕生した、新規の森林関連事業者数は10社。年間合計5,400万円の経済効果が生まれています。さらに、厚真町内でのバリューチェーン構築に向けた兆し、住民と森林が触れ合う機会の創出やイベントの増加、厚真町を訪れる人の増加等、定性的な効果も生み出しています。

また厚真町は、2018年に発生した北海道胆振東部地震により、大きな被害を受けた町でもあります。土砂崩れにより町内の森林の約11%にあたる3,160ヘクタール（東京ドーム約670個分）が崩壊しました。しかし、町は2次災害に備えながら、森林の再生と路網の復旧を進め、地震前から取り組んできた森林の活用に改めて取り組んでいます。

本レポートは、ローカルベンチャー協議会が、参画自治体が重要と位置付ける施策に対し、どのようなステップで実現させるかを示すために作成した「ロードマップ」についての報告の第1弾です。厚真町では、町で誕生した森林関連事業者を「森林ローカルベンチャー」と呼び、それらがこれまで厚真町に及ぼした影響と、「環境保全林」の活用を含めた今後の展望をまとめました。

目次

1. はじめに	
1.1 ローカルベンチャー協議会とは	4
1.2 ローカルベンチャー支援の取り組み	5
1.3 このレポートについて	6
2. 厚真町とは	
2.1 厚真町の概要	7
2.2 ローカルベンチャー推進の取り組み	7
2.3 森林活用	8
3. 厚真町の森林関連の取り組みと展望	
3.1 森林ローカルベンチャーによる効果	9
3.2 主要な森林ローカルベンチャー	10
3.3 環境保全林活用による 100 年後の“ありたい姿”に向けたロードマップと 実現のために必要な人材	11
3.4 むすびに ～厚真町の今後の展望～	17
【コラム】	
鹿を害獣から益獣に。「鹿送り」の儀式があった厚真町ならではの文化醸成!?	16

1. はじめに

1.1 ローカルベンチャー協議会とは

ローカルベンチャー協議会は、主に地方において地域社会の資源を活用して起業したり新規事業に挑戦したりする人(団体)をローカルベンチャーと呼び、その輩出・育成を目指しています。

2016年9月、岡山県西粟倉村とNPO法人ETIC.(東京都)の呼びかけに賛同した全国8つの自治体により発足し、その「広域連携によるローカルベンチャー推進事業」が内閣府の地方創生推進交付金に採択されました。

この事業の成果は、2016年度から2020年度(2021年3月)までの5年間で、参画自治体合計で、ローカルベンチャーによる売上規模の増加57億円、新規事業創出数274件、起業型・経営型人材の地域へのマッチング(就業紹介)400人にのぼります。

2021年度からは、さらなる深化・高度化を目指し、「自治体広域連携によるローカルベンチャー拡大推進事業」として、第2期の取り組みを始めました。現在6自治体が幹事自治体として参画しています。

1.2 ローカルベンチャー支援の取り組み

本事業におけるローカルベンチャーの起業・事業成長支援は、各自治体独自の取り組みと協議会全体としての取り組みの二層構造になっています（図）。

各自治体レベルでは、それぞれ民間の中間支援組織と連携し、地域によって異なる産業構造や気候風土に合わせた支援、さらに各事業者の規模・状況に適したきめ細かい支援を実施しています。

協議会レベルでは、本事業推進に必要な経営資源を豊かにしていくための共通プラットフォームの開発を行っています。また、第2期の取り組みにおいては、これまでの「0→1」の起業支援に加え、地域としての雇用創出や地域課題解決等を見据えて、新たな産業群を育てていくことを目指しています。



図 ローカルベンチャー協議会と自治体の各推進事業の二層構造

1.3 このレポートについて

本レポートでは、参画自治体の1つである北海道厚真町が、ローカルベンチャー推進事業において重要な位置付けである「森林ローカルベンチャー」のこれまでの実績・成果を示します。

さらに、厚真町が、林業だけでなく森林のもつ多面的機能の発揮による価値創造を目指す場所として位置付けた約 280 ヘクタール（東京ドーム約 60 個分）の森林エリア「環境保全林」の活用の展望についても示します。

この2点により、厚真町が今後、地域に生み出していく新たな産業群の姿を示すものです。

2. 厚真町とは

2.1 厚真町の概要

北海道厚真町は人口約 4,200 人、新千歳空港から車で約 35 分、札幌市内から約 90 分、苫小牧市から約 30 分と主要都市との交通アクセスに恵まれた町です。

農業、林業などの1次産業が盛んで、北海道らしい自然豊かな田園風景を楽しむことができます。また、太平洋に面した浜厚真海岸はコンスタントな波がある人気のサーフスポットで、年間約6万人ものサーファーが訪れます。また、北海道の中でも比較的雪が少ないので、雪に慣れない地域から移住しても暮らしやすい土地だといえます。

2.2 ローカルベンチャー推進の取り組み

ローカルベンチャー推進に関する取り組みとして、2016 年よりローカルベンチャースクール事業を行っています。ローカルベンチャースクールとは、自身のやりたいことを起点に町で事業を立ち上げる起業家の募集・選考を行い、地域おこし協力隊制度を活用した支援を行うプログラムです。

起業家や経営者として豊富な経験・経歴を持つメンターとマンツーマンで対話する「①メンタリング」、起業に必要な知識をインプットするために、事業とは何か、プレゼンテーションで大事なことなど、目的別の「②特別講義の提供」、地域で起業するというゴールを目指す「③参加者同士の交流」の3つが特徴です。

また、2021 年度のローカルベンチャー協議会第 2 期事業からは、地元事業者や新規創業者の事業成長支援のため、彼らと協働する地域おこし協力隊のマッチング支援も行っています。

2.3 森林活用

厚真町は町域の7割を森林が占めています。

人工林率は29%であり、地域の林業を支える森林資源となっています。また、天然林は萌芽による再生力が高く、人工林と共に木材生産の対象地として、炭木やキノコの原木を産出してきました。そのため、以前は林業従事者や製炭事業者、原木シイタケの生産者など森に関わりながら生活している町内事業者がいましたが、ライフスタイルの転換や林業の大規模化等により事業者が年々減ってきている状況でした。事業者の減少に伴い、木材を加工することができなくなり、丸太のまま付加価値をつけずに町外へと販売している状況となっていました。

そこで、厚真町では、林業を担う人材や木材を使う人材を誘致・育成し、厚真町で生まれる林業事業を、町内の事業体が担う割合を高めようとしています。さらに、町内で木材を加工して付加価値をつけてから町外に販売できるようになることを目標に、ローカルベンチャースクールなどの施策を組み合わせながら、林業施策を進めてきました。合わせて、産業とは違う興味や観点から森に関わる町民を増やすため、森林内で活動を行うNPO法人の立ち上支援や、保育園や小学校との連携を進めています。

しかし、2018年に発生した北海道胆振東部地震により、厚真町内の森林の内、3,160ヘクタールが崩壊し、森林資源と森林管理に必要な路網が大きく破損しました。地震前後で、厚真町の森林の状況は一変してしまいましたが、町としては崩壊した森林による2次災害へ十分に備えつつ、森林の再生と路網の復旧を進め、地震前から取り組んできた森林の活用に改めて取り組むこととしています。

上記の様な経験を踏まえて、厚真町では改めてこれからの人と森との共存の形を、環境保全林を中心としながら検討し、実行していく場として活用していく予定です。森林がもともと持っている再生力を活かしつつ、人が関わることで場の魅力が増し、未来を切り拓く原動力となる「森林産業」が生まれて続けていく場の創造を目指しています。

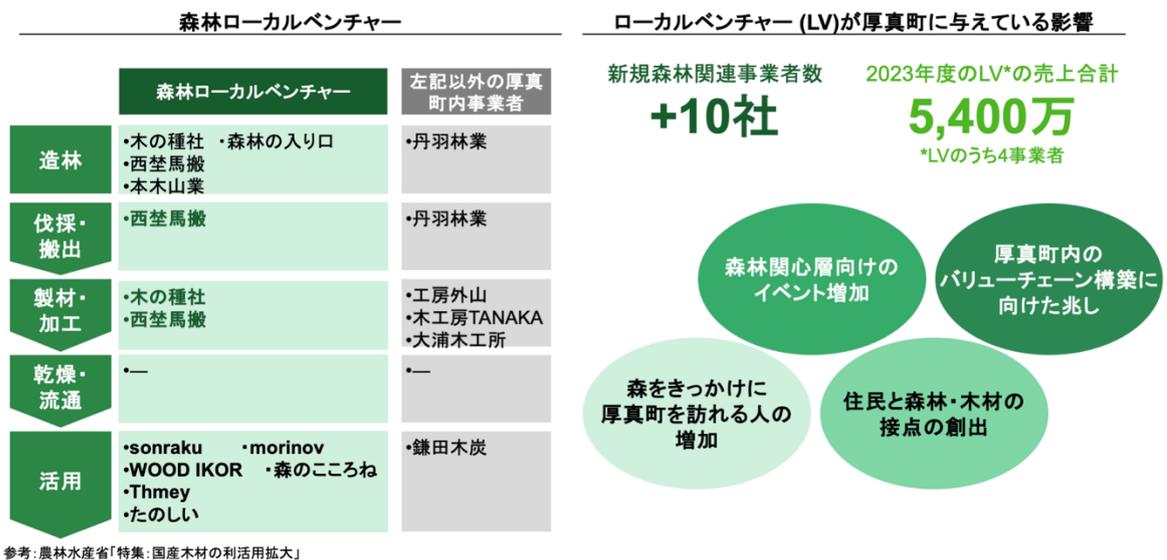
3. 厚真町の森林関連の取り組みと展望

3.1 森林ローカルベンチャーによる効果

厚真町でローカルベンチャースクールを開始した 2016 年から 2024 年までで、新規の森林関連事業者数は 10 社を数えるほどとなりました。

その結果として年間 5,400 万円の経済効果が生まれただけでなく、厚真町内でのバリューチェーン構築に向けた兆し、住民と森林が触れ合う機会の創出、イベント増加、厚真町を訪れる人の増加等、定性的な効果も数多く生み出しています。

厚真町の森林ローカルベンチャーの活動



3.2 主要な森林ローカルベンチャー



西楚馬搬（にしのばはん）

馬を使って山から伐採された木を運ぶ昔ながらの手法である馬搬を行い、重機が入れない間伐現場などで馬の能力を活かしています。小学校の野外教室など、子どもと自然が触れ合う機会の創出にも貢献しています。



木の種社

山で木を育てて伐る「林業」、丸太を挽いて板にする「製材」、製材された板から製品を成型する「木材加工」、木に関わるあらゆることに挑戦する「木の人」として活動しています。



燻製工房 Thmey（とまい）

サクラ、カエデ、シラカバ、ナラのチップを用いて、北海道を中心とする農産物・海産物や、カンボジアからの輸入農産品などの燻製品の製造・販売を行っています。

3.3 環境保全林活用による100年後の“ありたい姿”に向けたロードマップと実現のために必要な人材

環境保全林活用のロードマップ



本ロードマップの構成（表頭の各項目の考え方）

表頭の項目については、左側から以下のとおり定義しています。

- ・ インプット：アウトカムの実現に向け資源として活用し得るもの
- ・ 活動：環境保全林の目指す活用の形に向けて実施する必要がある項目
- ・ アウトプット：環境保全林の活動によってもたらされた結果
- ・ 短期・中期アウトカム：アウトプットから波及して生じる変化・効果
- ・ 長期アウトカム：最終的に目指す変化・成果

ロードマップ作成の背景・目的

本ロードマップは、ローカルベンチャー協議会が厚真町役場にヒアリングを行い、これまでの取り組みを整理して作成しました。環境保全林等の活用によって形成を目指す森林ベンチャー産業群の姿と、今後の展望に向けて必要な活動を描いたものです。

同時に、誰と、ロードマップのどの部分で協力しあい、関係する人や地域を高めあうことができるかを探る共通言語になるものとしても作成しました。各ステークホルダーと厚真町の目指す姿のすり合わせや、目指す姿に向けた現在地を把握すること等に活用することを目的としています。

厚真町では、今後、環境保全林の活用によって長期的（100年後）には「人と森との豊かで柔らかさのある共生」を実現していきたいと考えています。そこに向けて、10年後には大きく「環境保全林の活用によって持続可能な10億、20億の経済規模が環境保全林の中で生まれること」「住民と森林との関係性を喜ぶ文化が生まれていること」の2点を実現することを目指します。

それらアウトカムの実現に向けては、「森づくり」「森林と共生した林業づくり」「チャレンジしやすい土壌づくり」「住民と森林との接点づくり」「厚真町を訪れる消費者づくり」の5つの活動が必要になると考えています。そのうち、森林ローカルベンチャーの活動は、これらの活動の中核を成す重要なものです。

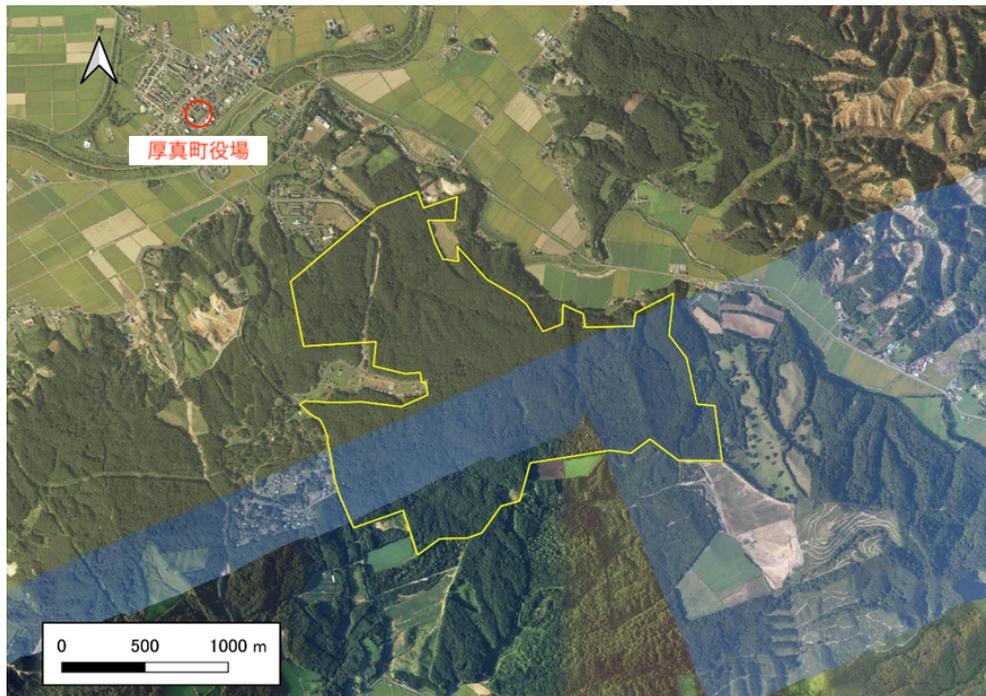
環境保全林とは

厚真町の環境保全林（新町、宇隆、豊沢地区）は、中心市街地から2kmほどの距離にある、約280ヘクタールの一塊の森林です。比較的平坦で、ササ類の繁茂が少ないため、森林の中を歩きやすいという特徴があります。環境保全林の大部分が広葉樹の2次林で、過去（50～70年程度前）に薪炭林として伐採された後、再生して成立した比較的若い森林となっています。

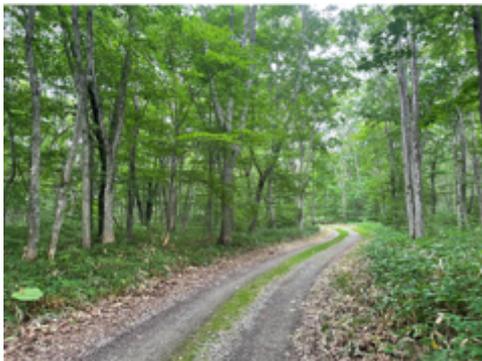
環境保全林は、過去に住宅地やゴルフ場として開発される予定でしたが、ゴルフ場計画が頓挫した平成17年に、厚真町が民間企業から一括して買い取った場所です（厚真町土地開発公社が民間企業から先行取得した後、町が買い取り）。町が取得した時から、隣接する住宅地の環境の維持や農業用水確保も含めた森林環境の保全に併せて、地域住民の保健休養や自然学習の場として活用することが、目標として設定されていました。

これまでも、住民向けの散策会や植物観察会、簡単な森林整備などを実施してきましたが、厚真町が2016年から実施してきたローカルベンチャースクール事業により、森林に関わる起業家が増えてきたことに伴い、環境保全林の活用の可能性がこれまで以上に広がり始めています。

地図と写真



環境保全林の区域図（黄色の枠線内）



森林と林業専用道



散策路に配置された木橋

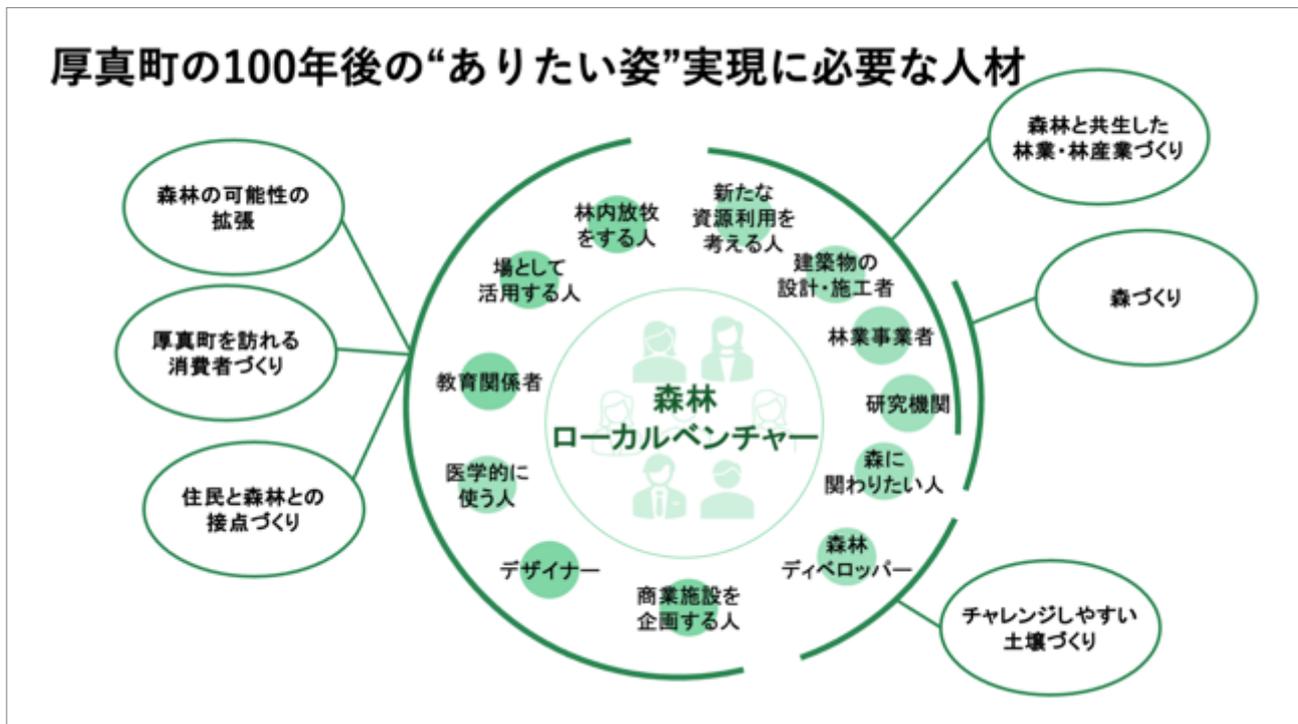


ササの無い天然林の林床と散策路



カラマツ人工林と散策路

100年後の“ありたい姿”実現に必要な人材



上記ロードマップの実現に向けては、現行の森林ローカルベンチャーの活動によってのみ達成されるものではありません。

厚真町では、町が目指す姿の実現に必要な活動を、町の様々なステークホルダーと議論してより具体化していくとともに、それらの活動に必要なステークホルダーとの協働を積極的に進めていきたいと考えています。

例えば、各活動に紐づき以下のようなステークホルダーを想定しています。

<各活動>

- ・ (1) 厚真町を訪れる消費者づくり、住民と森林との接点づくり
- ・ (2) 森林と共生した林業・林産業づくり
- ・ (3) 森づくり
- ・ (4) チャレンジしやすい土壌づくり

(1) 厚真町を訪れる消費者づくり、住民と森林との接点づくり

環境保全林を木材としてだけではなく、場所、葉、動物、菌…など様々な観点で活動をする人

- ・ 林内放牧をする人
- ・ 森林内で農業（アグロフォレストリー）をする人
- ・ 森林を使った教育コンテンツを生み出す教育関係者
- ・ セラピー等で医学的に森林を活用してする人
- ・ 場として森林を活用する人
- ・ デザイナー
- ・ 商業施設を企画する人

(2) 森林と共生した林業・林産業づくり

林業関連事業者として、厚真町内で森林バリューチェーンを構築する人

- ・ 林業従事者
- ・ 木材の乾燥・流通事業者
- ・ 木材の活用方法を考える人

(3) 森づくり

- ・ 持続可能な森づくりをしていく人
- ・ 持続可能な森の指標を考える研究機関
- ・ 持続可能な森林利用をしていく林業従事者
- ・ 持続可能な木材の活用方法を考える人

(4) チャレンジしやすい土壌づくり

ありとあらゆる活動が環境保全林で生まれるための環境を整える人

- ・ 森林ディベロッパー

【コラム】

鹿を害獣から益獣に。「鹿送り」の儀式があった厚真町ならではの文化醸成!?

上記の活動「厚真町を訪れる消費者づくり、住民と森林との接点づくり」に関連し、厚真町ではシカを害獣ではなく益獣として捉えてもらえるような取組もしていきたいと考えています。

元々、アイヌ民族には、熊などの神（カムイ）として崇められている動物を“送る”という文化があります。子熊を1～2年ほど集落で育ててから、その魂を神に送り返す儀式で「熊送り（イオマンテ）」と呼ばれていました。熊送りの儀式の様子は絵や埋蔵文化財として残っていますが、鹿は“送る”対象ではないと考えられていたため、鹿送りの痕跡は見つかっていませんでした。

しかしながら、厚真町では鹿を送ったと推測される痕跡（4頭分のオス鹿の頭骨を積み重ねたもの）が見つかっており、鹿送りがされていた地域であることが示唆されています。厚真町で確認された「鹿送り」の文化もふまえ、現在は害獣として捉えられている鹿を益獣として捉えられるようにし、鹿を“送りたくなる”存在にまで昇華することで、これまでの環境との関係性を組み込んだ形での厚真町ならではの文化も作りあげていきたいと考えています。

3.4 むすびに ～厚真町の今後の展望～

本レポートのむすびに、厚真町産業経済課主幹の宮久史さんにコメントをいただきました。

森に関わる人たちを集めたい

今回のロードマップづくりの議論を経て、厚真町が取り組んできているローカルベンチャースクールにおいて、森に関わる人たちが集まるように旗を掲げたいと考えています。「こういう人が必要です」と示しながら起業家を募っていきます。それに向けた現場のツアーも実施予定です。

研究者の方々と一緒に、森の状況を把握するための指標づくりも進めようとしています。河川生態系や生物多様性、枯損木等の研究者の協力を仰ぎながら、2024年8月には関係者みんなで現場を歩きました。

厚真町内の既存の林業のプレイヤーたちとも、彼らの経営状況を聞きながら、これから一緒に何ができるかを考えています。既存事業者の体力をよりつけるためのバックアップを組み立てていきたいと思えます。

環境保全林を活用していくための森林整備とそのフィールドを活用した事業の創出へ

環境保全林に何が必要なのか、何があれば人と森との共存の形が作れるのかを、森の中を分けしながら、必要な機能や産業を検討しています。

その土台となるのが、色々な人が関わるきっかけとしての森林整備です。森の中の空間が居心地のいい空間になることが、最初のステップになると思います。森林整備事業そのものの事業規模は大きくありませんが、居心地のよい森林空間こそがインフラになります。厚真町内の既存のローカルベンチャーにとっても、活動していく基盤のフィールドがひとつ増えていく形になります。

整備されたフィールドを活用した事業として、多様なアイデアが考えられます。第一に、森を体験や食に変換させていく人たち。例えば、以下のような取り組みが森の価値をさらに高めます。

- ・ ホーストレッキングを含めた体験や宿泊
- ・ レストラン等の飲食機能
- ・ 林内放牧でのチーズ生産など、林内農業による食の生産 など

さらには、次のような、森を活用した新たな空間活用、森林ディベロッパーとしての事業も考えられます。

- ・ 森の中で働きたい人向けのオフィス事業
- ・ 森を活用した新たなマテリアルの開発に向けたラボの立地
- ・ 森を壊さない形での宅地事業 など

これらの事業を通じて、新たに10億、20億の事業を生み出し、経済的にも持続可能な森づくりを進めていきます。

森と人が共存していける未来へ

「森を壊さない」とは、森の持つ再生力の内数で利用をするということだと考えています。いまの初期値から森の機能を低下させないことを目指しています。例えば、280ヘクタールの森林の中に3本の沢があります。この水の量が減らない、鳥や植物の種数や個体数も減らないということ、きちんとモニタリングしながら進めていきます。

適度な攪乱があることで、暗い所が好きな生き物と、明るいところが好きな生き物が棲み分けしながら共存していくことが可能になります。攪乱がなければ森は生い茂って暗くなります。そうなるとその環境が好きなものしか残ることはできません。適度に人間が関わり、森に攪乱が起きることで生物多様性がむしろ増していく、そんな未来を、科学的なエビデンスに基づいた形で、調査・観察しながら、大きな変化を恐れながら進めていくことが大切です。

環境保全林で取り組むことの意味

2018年9月6日に、厚真町を震源地とした最大震度7の北海道胆振東部地震が発生しました。地震は人にとっては災害ですが、自然にとっては攪乱です。地震に伴う自然攪乱で、そのままにした方が生物多様性が高まることがあります。人工林が倒れ、均質だったものが不均質になります。それをコンクリートや人の都合で治山事業をすることは、時に自然破壊にもなりえます。厚真町でもまったく手をつけず崩れたままの場所を残しており、人が手を加えた場所と加えない場所とを比べられるようにしています。

我々は消費しないと生きていくことはできません。自然環境を使わないと生きていけない生き物です。そこを認めた上で、よりサステナブルに、我々だけでない、次や次の次の世代も含めた活用の仕方が見いだしているのかどうか。そこについて考え続ける必要があります。この形で正しいのか含め、いま考える共存の形をアップデートしながら活用していける場にしていきたいと思えます。それが森にとっても、生物にとっても、生態系にとってもポジティブであって欲しいと願っています。

制作 ローカルベンチャー協議会（事務局 NPO 法人 ETIC.）
東京都渋谷区東1丁目1番36号 キタ・ビルデンス 402
メール：local-info@etic.or.jp 電話：050-1743-6743